

# アーカイヴとしてのコーラ

——総主教アタナシオス書簡集 (Codex Vaticanus Graecus 2219) の場を求めて——

橋 川 裕 之

## 要 旨

本稿の目的は、コンスタンティノーブル総主教アタナシオス 1 世（在位 1289-93 年、1303-9 年）の主要写本であるヴァティカン写本 (Codex Vaticanus Graecus 2219) に深く関係した場所を、14 世紀のビザンティン社会の内に突き止めることである。アタナシオスはビザンティン末期の教会と社会のラディカルな改革者としてのみならず、精力的な書簡の書き手としても知られる。ヴァティカン写本はそのアタナシオスの書簡集としての性格を有する写本群のうち、もっとも多くの書簡を収録し、もっとも早くに成立したと推測され、彼の書簡のみから構成される写本としては唯一のものである。本稿はテオドロス・メトヒティスやニキフォロス・グリゴラスといった 14 世紀の著名な知識人の残した記述資料の分析にもとづき、ヴァティカン写本は 1310 年代半ばないし後半、ときの皇帝アンドロニコス 2 世（統治 1282-1328 年）の側近メトヒティスの手で大々的に修復されたコーラ修道院のアーカイヴを構成する一資料として制作された、という新説を提示する。

## The Chora as an Archive: In Search of the Place of Codex Vaticanus Graecus 2219

Hiroyuki HASHIKAWA

## Abstract

This article aims to determine in fourteenth-century Byzantine society the place or location which was closely related to Codex Vaticanus Graecus 2219, the extant principle manuscript of the letter collection of Patriarch Athanasios I of Constantinople (1289–93, 1303–9). Athanasios is known not only as an idiosyncratic reformer of Byzantine church and society but also as an energetic letter writer. It is assumed that the manuscript, which contains the largest number of letters among those that can be categorized into his letter collections, was created initially from the archetype and is a unique one that consists only of his works—mostly letters and some sermons. Based on a reading of the writings of such leading intellectuals of the fourteenth century as Theodoros Metochites and Nikephoros Gregoras, this article concludes that Codex Vaticanus Graecus 2219 was created by a scribal circle of Constantinople in the mid- or late 1310s to comprise an archive that Theodoros Metochites, the then prime minister of Emperor Andronikos II Palaiologos (1282–1328), could attach to his renowned and magnificent library of the Chora monastery (present-day Kariye Museum). Metochites completed the restoration of the monastery in 1321, decorating the church with fine mosaics and frescos.

## はじめに

とあるギリシャ語写本の表題にはこうある。「我らの聖なる父コンスタンティノーブル総主教アタナシオスの、皇帝およびその他の人々に宛てられた、その大いなる神的熱意を顕示する諸書簡」<sup>(1)</sup>。

13世紀末から14世紀初頭にかけて、アタナシオスという名の一人の修道士が二度にわたってコンスタンティノーブル総主教に就任し、ビザンティン帝国の教会と社会全体を対象とする、ラディカルかつ特異な改革を推進した。トラキア地方の都市アドリアノーブル出身のこの人は、今日、コンスタンティノーブル総主教アタナシオス1世と呼ばれている(在位1289-93、1303-9年)<sup>(2)</sup>。彼がありきたりとはいいがたい総主教であったことは、彼に関する種々の記録や伝承から明らかである。彼は総主教に就任すると同時に、不正あるいは不適と彼がみなした教会の問題を徹底的に改善する姿勢を示し、ときのアレクサンドリア総主教を始めとする有力主教や、コンスタンティノーブルの大教会(聖ソフィア教会)に勤務する高位聖職者や、アルセニオス派と呼ばれる教会分派勢力とも激しく対立した<sup>(3)</sup>。彼はその死後も一定の影響力を保ち、14世紀の半ばには公的なプロセスを経て正教聖人に認定され<sup>(4)</sup>、同世紀に活躍した高名な神学者グリゴリオス・パラマスからは神秘霊性ヘシカズムの先駆者の一人として好意的に言及されている<sup>(5)</sup>。

本稿にかかわるのは彼の改革とは別の特徴、すなわち、彼がビザンティンの歴代総主教の中でも、ひとときわ精力的な書簡の書き手であったことである。彼が総主教となる以前に書簡をどの程度書いていたのかは、その時期に由来する書簡が一通も確認されておらず、アタナシオス自身の証言もないため、明らかではないが、彼が1289年に総主教となって以降書き綴った書簡は約180通が現存しており、この点から、彼が書簡の執筆と送付を重んじた教会人であったことがわかる。書簡は当時の政治エリート層や教養人の間では意思伝達や情報交換のためにごく普通に使用されたメディアであり、他の総主教もまとまった史料として現存していないだけで、実際には多くの書簡を書いていた可能性もなくはない。しかし1259年から1453年までのいわゆるパレオロゴス朝期に総主教を務めた人物のうち、アタナシオスのそれと同等規模の書簡集が伝わるのは、アタ

ナシオスの前任者、キプロスのグリゴリオス2世(1283-89年)のみという事実から、アタナシオスがグリゴリオスとともにパレオロゴス朝期の総主教としては特別な書簡作者であったことが確認される。

筆者自身を含め、これまでアタナシオスに関心を寄せた研究者が主として注目したのは書簡の宛て先と内容である。というのも、それらはアタナシオスの生と行いについての、とりわけ彼が総主教として抱いた理想とその実現に向けた試みについての直接的な証拠となるからである。現存する書簡の概観から直ちに浮かび上がるのは、彼が、彼を総主教に選んだ皇帝アンドロニコス2世(統治1282-1328年)やその他の皇族、聖職者、修道士らに説論的あるいは嘆願的な内容の書簡を次々と送り、ビザンティン教会の長として、また、禁欲と敬虔をとりわけ重視する修道士として、危機に瀕した帝国社会に平和と秩序を回復させるために、並外れた労力を費やしていたことである<sup>(6)</sup>。アタナシオスの書簡は全体的に切迫してしばしば辛辣な内容、簡明ではないが直截な文体、宗教色の強さを顕著な特徴としており、知的生活と交友の実態を高度にレトリカルな文体で伝えるビザンティン知識人層の一般的な書簡とは大きく異なる<sup>(7)</sup>。

本稿で取り上げるのは、冒頭で表題を引用したアタナシオスの主要書簡写本、現在はヴァチカン教皇庁図書館(Biblioteca Apostolica Vaticana)に所蔵されているヴァチカン・ギリシャ語写本2219番(Codex Vaticanus Graecus 2219; 以下、ヴァチカン写本と略)<sup>(8)</sup>である(図1)。この写本は、アタナシオスの複数の書簡を含む、つまり彼の書簡集としての性格を有する写本群のうち、もっとも多くの書簡を収録し、もっとも早くに成立したと推測され、彼の書簡のみから構成される写本としては唯一のものである。この写本に深く関係した場所を、14世紀のビザンティン社会の中に突き止めることが本稿の目的である。

中世の写本あるいは書物の場所に関する問題は、大雑把に言えば、以下の三つのカテゴリーに分類可能であろう。すなわち、制作の場所、利用の場所、保管と獲得の場所である。写本は利用される物体である以上、どこかで制作されねばならないし、制作された物体としての写本はどこかで利用されねばならない。制作の場所と利用の場所をつなぐのが、保

管と獲得の場所である。利用に先立ってそれは獲得されねばならないし、継続的な利用が想定される場合、それはどこかに保管されねばならない。書物を取り巻く状況は、15世紀のグーテンベルクの発明の以前と以後で大きく異なる。よく知られているように、グーテンベルクによる活版印刷術の発明は、書物の大量生産と広範な流通を可能にしたが、それ以前の書物はすべて写字生の手作業によって制作されており、一冊の制作に要する労力とコストの関係から、社会でのその流通は限定的であった。

ビザンティン社会の書物取引について、W・ヘーランダーは次のように述べている。「古書および稀観本には若干のマーケットが存在したが、新本はつねに、注文者である私的図書館のため、もしくは公的ないし教会の施設の図書館のため、注文を受けて制作された。〈中略〉書物を獲得したり蒐集したりするのは施設とごくわずかな富裕な個人の特権であった。高値のせいで、知識人らは購入を通じてはその書物への需要を満たすことはほとんどできず、結果として、学者たちはしばしば本を貸し借りし、それらを個人的に書写した」<sup>(9)</sup>。このような活版印刷術の発明以前の状況を考慮に入れば、ビザンティン社会において、人が新本を専門の店舗で購入するという慣行はまず存在しなかったはずであり、少なくとも、書物の制作とその利用との関係は現代よりも格段に密なものであった。写本（より正確には冊子本／コーデックス）は中世における一般的な書物の形態であり、保管と利用の一般的な場所は同一の生活空間、住居であった。写本を入手した人が私人の場合、それは自宅であり、修道士の場合は彼が単独で、あるいは他の修道士とともに暮らす修道院であった。写本は通常、そうした住居の中の図書室かそれに準じる空間で保管された。写本の制作の場所はすでに述べたような制作の物理的条件から、保存と利用の場所ほどの広がりを持たず、技術と資金に不自由しない公的施設か修道院に限定されたであろう。豪華な挿絵写本の制作で有名なストゥディオスの聖プロドロモス修道院<sup>(10)</sup>のような一部の施設には、図書室とは別個の作業スペース（写字室／スクリプトリウムおよび挿絵工房／アトリエ）が設置されていたと思われる<sup>(11)</sup>。

ヴァティカン写本についていえば、それが制作された場所も、当初保管された場所も、利用・閲覧された場所も不確かな状態に留まっている。その一つ

の大きな理由は、この写本に関連する場を明示する直接的な証拠が、写本そのものの中にも、それ以外の記述資料の中にも見出されないことである。現在、ヴァティカン教皇庁図書館にあるこの写本の由来を確実に追跡できるのは、ローマの枢機卿ジョヴァンニ・サルヴィアティ（1490-1553年）がその他のギリシャ語写本とともにそれを入手した、16世紀までである。サルヴィアティはいかにしてこの写本を入手したのか、この写本はいかにしてローマに到達したのか、現時点では完全に不明である。けれども、以下で詳しく紹介される2人の文献学者の努力によって、この写本が14世紀前半のコンスタンティノープルで制作されたことは、ほぼ確実な事実とみなされうる。ビザンティン写本に精通したこの2人の学者は、ヴァティカン写本の場所と制作の経緯について異なる仮説を提起しているが、我々は以下の論述において、いずれの仮説も確実というには不十分であることを示し、その制作と保管に強く関係した場所、とくにその制作に関与した人々が保管のために念頭に置き、実際にそれが保管された場所について、ほぼ確実というに足る、一つの新たな仮説を提示するつもりである。

我々の仮説はすでに本稿の表題によって指示されている。コーラ（χώρα）はギリシャ語の女性名詞であり（中世の読みではホラ）、第一に場所や位置を意味し、そこから派生して、土地や国土、都市に対する地方なども意味した。けれどもビザンティン帝国において、ある時期からコーラは固有名詞としても通用するようになった。ビザンティン研究者には周知のことであるが、固有名詞のコーラとは、6世紀ごろ、コンスタンティノープル市内の北西部、ブラヘルネ教会近くに建立されたコーラ修道院のことである（図4と5）。この長い歴史を誇るコーラ修道院が1310年代後半、皇帝アンドロニコス2世の側近、テオドロス・メトヒティスの指揮のもとで修復され、豪華なモザイク画およびフレスコ画の装飾を施されたことは、それらの内部装飾が今日、カーリエ博物館と名を改めた修道院の旧主聖堂において一般に公開されていることとあわせ、ビザンティン美術史では基本的な知識である（図6）<sup>(12)</sup>。1310年代後半において装いを新たにしたコーラ修道院には、従来の図書館としての機能にアーカイヴとしての機能が付加され、総主教アタナシオスのヴァティカン写本は同院のアーカイヴを構成する重



要資料の一つとして制作された。

我々のこの簡潔な仮説に含まれる一冊の書物と一つの施設、ヴァティカン写本とコーラ修道院、これらはいったい何によって結びつくのか。

## 1 ヴァティカン写本とその他の写本

V〔ヴァティカン写本〕が関係するのは、公的な事業か、それとも私的な事業か、公的なアーカイヴか、それとも私的な図書室かという難問にはここでは立ち入らない。〈中略〉Vはおそらく、総主教グリキスの指揮する総主教座のアーカイヴ・プロジェクトの一環として制作され、総主教座のアーカイヴで保管されたか、グリキスやニキフォロス・グリゴラスもそこに含まれた教養人サークルにより、そこに属す何者かの私的図書室の蔵書となるべく制作された<sup>(13)</sup>。

これは筆者が二年前に本誌の創刊号において発表した論文「声を救う——アタナシオス書簡集の起源について」からの引用である。本文30頁を費やして筆者がそこで議論したのは、アタナシオスの書簡集の複数の起源についてであり、とりわけ、なぜアタナシオスの書簡集が存在するのか、という素朴な問いについてである。なぜ特定の人物の書簡集が存在するのかという問いには、ものに関する位相と、意思に関する位相がある。つまり、ある人物の書簡集を制作するためには、一方で、送り手から受け手へと空間を移動した「オリジナル」であれ、送り手もしくは受け手の側で何らかの理由で作成された「写し」であれ、その人が書いたり受け取ったりした書簡の現物が必要であり、他方で、その人の書簡集を制作しようとする何者かの意思が必要である。わかりやすいのは、キプロスのグリゴリオスの事例である。グリゴリオスの書簡集として伝わる写本には、作者自身の自伝的序文が付されており、そこで彼は読み手に向けて、自らの「手元にある書物」を読むよう誘っている<sup>(14)</sup>。彼の「手元にある書物」が序文と書簡のみで構成されるものであったのか、それとも、書簡のみならず、彼のすべての著述を集成するものであったのかは明らかではないが、結果として、また形態として、序文の作者が読み手に読書と呼びかけているのは、彼の総主教就任以前に書かれたものと就任以後に書かれたものをまとめた、純

然たる書簡集である。なぜ、グリゴリオスのこのような書簡集が存在するのか、という問いへの単純な答えは、彼自身がその書簡集の制作を欲し、そのための実際的な注意を払っていた、というものである。もちろん実際的な注意というのは、自らが執筆した書簡を価値ある作品とみなし、他人に送付する書簡については将来の集成を念頭において、写しを作って手元に残すことである。

筆者の先の論文は、グリゴリオスの書簡集の起源とアタナシオスの書簡集の起源は質的に異なるのではないか、という個人的直感と、ヴァティカン写本には一通の偽書が含まれるというA・ファイエの（他のアタナシオス研究者からは完全に見落とされている）重大な指摘にもとづき、後者の一つの起源を、アタナシオスのグリゴリオスの文人的なそれとはまったく異なる自意識に求める試みであった。

具体的に注目されるのは、14世紀前半に匿名の写字生によって制作され、もっとも多くの書簡を収録するヴァティカン・ギリシャ語写本2219番の二つの「変則」である。一つは、この写本にはアタナシオスの最初の在位期に由来することが明らかな書簡は1通しか含まれていないこと、もう一つは、この例外的な1通は別の記述史料をもとに作成された偽書の可能性があることである。本稿はこの二つの変則が、アタナシオスのアーキタイプ書簡における差異、すなわち、アタナシオスが手元に残した写しと受け手に送られた現物の差異に発していること、そして、彼が1297年の政治的事件を機に自らの「書かれた声」の力を認識し、送付する書簡の写しを作り始めたことを明らかにする<sup>(15)</sup>。

これは同論文の冒頭に掲載された要旨の一部であるが、アタナシオスの書簡集がなぜ存在するのか、という問いへのその答えは、アタナシオスがある時期以降、自らの送付する書簡の写しを作り始めたから、というものであった。無論これは問いに対する、一面的な答えに過ぎないが、ヴァティカン写本の中の「変則」と筆者が呼ぶものは、このように考えるよりほかに答えるすべがないのである。以下はその他の論点も含めたより詳細な要約である。アタナシオスは1293年10月の総主教辞任の間に、聖ソ

フィア教会内の柱頭に反対勢力への破門状を隠し置いた。この破門状は1297年になって偶然発見され、その激烈な内容は皇帝アンドロニコスやその周辺の人々に大きな衝撃を与えた。アタナシオスはこの事件以降、送付する書簡の写しを作り始め、この写しの束がある時期に集成され、ヴァティカン写本を構成した。ヴァティカン写本に収録されている最初の辞任状（タルボット版の111番）はファイエが指摘するとおり偽書であり、ヴァティカン写本の制作時に、関係者の何者かが、同時代の歴史家ゲオルギオス・パヒメリスの史書を参照し、同書に引用されているアタナシオスの破門状の二つのテキストをもとに、単一のテキストを捏造し、それを正式な辞任状としてヴァティカン写本に収録した。その後、アタナシオスの伝記の作成に着手したストゥディオスのテオクティストスなる人物は、ヴァティカン写本の最初の辞任状（111番）が偽書であることに気づかず、その全文をその著作に引用し、その後、新たなアタナシオス伝を書き始めた修道士ヨシフ・カロテトスもその偽書を偽書と気づくことなく、テオクティストスの著作から自作に引用し、さらに、自作の独自性を際立たせるためであろう、テオクティストスが引用しなかったアタナシオスの二度目の辞任状（タルボット版の112番）もその著作に引用した（出典はおそらくヴァティカン写本）。

ヴァティカン写本の間をめぐり我々の考察は、以上の議論を踏まえたうえで、アタナシオスの書簡集の存在をめぐり問いに別方向からアプローチするものである。

ここでの議論をより明確なものとするために、ヴァティカン写本がアタナシオスの書簡写本の中でどのような位置を占めるのか、基本的な情報を改めて確認しておこう。アタナシオスの書簡写本について重要な文献学的研究を行っているのは、A・M・タルボットとM・パテダキスである。前者はヴァティカン写本の最初の3分の1のフォリオを占める115通の書簡を校訂し、英語対訳とコメントリーを付して刊行し<sup>(16)</sup>、後者はヴァティカン写本およびタルボットが参照しなかったアレクサンドリア総主教庁図書館所蔵のギリシャ語写本288番（アレクサンドリア写本と略）から17通の書簡を校訂し、詳細な序文とコメントリーを付した学位論文をオックスフォード大学に提出している<sup>(17)</sup>。写本学的見地から14世紀前半の制作時期が推測されるヴァティ

カン写本は、16世紀前半、メディチ家出身の母（ルクレツィア）を持つローマの枢機卿ジョヴァンニ・サルヴィアティの所有物となった<sup>(18)</sup>。サルヴィアティ家の財産となったヴァティカン写本は、スペイン出身のイエズス会士フランシスコ・トーレス（1509頃-84年）など対抗宗教改革の一部の推進者からアタナシオスの書簡が注目された16世紀半ばに、何度か書写されている<sup>(19)</sup>。ヴァティカン写本そのものは19世紀前半にサルヴィアティ家を離れ、ヴァティカン教皇庁図書館にその場を移し、今日にいたっている。

アレクサンドリア写本はタルボットが写本カタログの不正確な記述のため、検討対象から除外していたものである。パテダキスはアレクサンドリア写本の内容を直接確認した結果、それが、ヴァティカン写本に未収録の二つのテキスト（書簡と説教）を含む、きわめて重要な写本であることを発見した<sup>(20)</sup>。アレクサンドリア写本の制作がヴァティカン写本よりも後であるのは確実である。パテダキスは両写本のテキストを比較し、アレクサンドリア写本は14世紀後半のある時点で、ヴァティカン写本の後の3分の2のフォリオにある修道士と聖職者を宛て先とする書簡と、何らかの理由でヴァティカン写本への収録から洩れていた書簡および説教とが書写されてなったものと結論づけている<sup>(21)</sup>。したがって、パテダキスの研究は、ヴァティカン写本を「アタナシオスの著作のもっとも古く、もっとも完全な写本」<sup>(22)</sup>とするタルボットの見解を覆すものではない。

これに関連して注意すべきは、アタナシオスの書簡ないし著述の主要写本は、ヴァティカン写本とアレクサンドリア写本のわずか2点しか確認されないことである。タルボットによれば、ヴァティカン写本は14世紀前半に制作され、パテダキスによれば、アレクサンドリア写本は14世紀末に制作された。ヴァティカン写本はアタナシオスの書簡集ないし著作集としての性格を有する独立の書物であるのに対し、アレクサンドリア写本は、アタナシオスの書簡とその他の宗教的著述を集成した、雑録的な書物である。計455フォリオからなるアレクサンドリア写本全体において、アタナシオスの書簡が位置するのは145フォリオから231フォリオまでの87フォリオ、全体の5分の1ほどであり、その制作のコンセプトがヴァティカン写本のそれと異なることは明らかである。この二つの主要写本のほか、ア

タナシオスの複数の書簡を含む写本はこれまで7点確認されているが、そのうち5点はヴァティカン写本に由来し、残りの2点はヴァティカン写本からの複写に由来しているとパテダキスは指摘している。これが示唆するのは、アタナシオスの書簡ないし著述の「もっとも完全な」写本は14世紀から今日にいたるまでヴァティカン写本のみであって、ヴァティカン写本全体あるいはそのほぼ全体の複写は制作されなかった可能性である。

アタナシオスの写本と好対照をなすのは、彼の前任総主教、キプロスのグリゴリオスの写本である。W・ラミアの研究によれば、グリゴリオスの書簡の主要写本はかつて5冊が存在したという。5冊のうち、イタリアのトリノおよびスペインのエル・エスコリアルで保存されていた2冊（Taurinensis Pas. gr. 356とScorialensis IV-5-20）は20世紀初頭までに火災にあって焼失した。トリノの写本は14世紀に由来し、計253フォリオの最初の143フォリオにグリゴリオスの書簡190通を含んでいたとされるが、1904年に焼失した<sup>(23)</sup>。エル・エスコリアルの写本は、グリゴリオスの書簡203通を含んでいたとされるが、1671年の大火によって失われた。この写本は、コーラ修道院の修復者、テオドロス・メトヒティスの145通の書簡を含む、唯一の写本であったともいわれている<sup>(24)</sup>。現存する3冊は、イタリアのモデナ、ヴァティカン、そしてオランダのライデンに保存されている。モデナの写本（Mutinensis 82 [III C 3]）は195フォリオからなり、自伝および215通の書簡を含む、グリゴリオスの独立の著作集である（図2）<sup>(25)</sup>。ヴァティカンの写本（Vaticanus Graecus 1085）は273フォリオからなる雑録であり、グリゴリオスの書簡はその中の194フォリオから265フォリオに位置する。この写本に含まれる224通の書簡は、グリゴリオス関連の写本の中でもっとも多い<sup>(26)</sup>。最後、ライデンの写本（Leidensis Bibliothecae Publicae Graecae 49）は196フォリオからなり、モデナ写本と同様、グリゴリオスの自伝と書簡のみを含むものである（書簡は215通）。127フォリオの余白に、「キリストよ、あなたの僕、ゲオルギオス・ガリシオティスを救いたまえ」という記入があり、これによって、この写本は14世紀の高位聖職者、ゲオルギオス・ガリシオティスによって制作されたことがわかる（図3）<sup>(27)</sup>。ラミアは現存する3写本の伝来について、モデナの写本と

ヴァティカンの写本はそれぞれアーキタイプ（グリゴリオス自身の筆に由来したはずの現存しないオリジナル）に由来する別系統のもので、ライデンの写本はモデナ写本に直接由来すると結論づけている<sup>(28)</sup>。

グリゴリオスは1283年から1289年にかけてコンスタンティノーブル総主教を務め、退位後ほどなく首都内の修道院で死去したとされる。自伝には、彼が自らの総主教在位を回顧する記述があることから、彼は残されたわずかな時間を修道士として過ごす間に、現存する写本のアーキタイプとなる書物を作ったのであろう。現存する三つの写本はグリゴリオスの死以降、より具体的には1290年ごろから15世紀初頭の間に、モデナ、ライデン、ヴァティカンの写本の順で制作されたと思われる。焼失した2冊の写本学的詳細を明らかにすることはできないが、制作はほぼ同じ年代に位置するであろう。

ラミアは14世紀から15世紀にかけて制作されたグリゴリオスの書簡の副次的写本を15冊挙げており、主要写本の数と合計すれば20となる。グリゴリオスの書簡の写本は、主要写本でみても副次的写本でみても、アタナシオスのそれを大きく上回る。これが意味することは単純であり、アタナシオスの書簡よりもグリゴリオスの書簡のほうがギリシャ語の書物を写して読む特定の人々に強く必要とされたということ、そうした人々はアタナシオスの書簡よりもグリゴリオスの書簡のほうに強く惹かれたということである。ほぼ同じ時代を生き、コンスタンティノーブル総主教という同じ要職に就きながら、現存する写本の数に大きな開きがあるのはなぜなのか。その自伝にあるグリゴリオス自身の言葉が一つの手がかりとなろう。「その諸著述に関して、著者が模倣と称賛に値する何かを達成できたとすれば、この著作は吟味を望む人々に供されるであろう。かくして私は今、手元にある書物を名指す」<sup>(29)</sup>。グリゴリオスの自伝は、「彼自身の生について、別の人によるかのような」というモデナ写本の表題<sup>(30)</sup>のフレーズが示すように、グリゴリオスが自らの生涯を第三者の視点から書き綴ったものである。ここでグリゴリオスのいう「模倣と称賛に値する何か」とは、総主教就任の以前から彼が折に触れて書き、おそらくは手元に写しを残していたおびたしい書簡にほかならない。彼が自らの書簡集への序として、簡略な自伝を書いたことは、自伝を含む写本す



べてに書簡が含まれている事実から示される（モデナ写本、ライデン写本、Laurentianus plut. 56. cod. 3、Vaticanus 1696）。彼の自伝は単独では、より正確に言えば、書簡とは別個には伝わっていない。グリゴリオスは自らの書簡の修辞学的あるいは文学的価値を確信し、それらを後の世代に伝えるべきものと判断し、隠退先の修道院の中で一冊の「書物」を作り、結果、これが現存する諸写本のアーキタイプとなったのであろう。

宗教的というよりはむしろ世俗的な、あるいは明確に知的な理由によって書簡集を作るというグリゴリオスの行いは、ラテン人支配下のキプロス島出身の貧しい学生でありながら、古代ギリシャ人の学である哲学に熱中し、やがてコンスタンティノーブルにおいて卓越した教師として頭角を現した彼の生き方とうまく合致する<sup>(31)</sup>。別のいい方をすれば、グリゴリオスのこのような行いは、年少の時分から修道生活に憧れを抱き、聖地エルサレムを含む様々な土地を修道士として渡り歩き、やがて正教信仰の不屈の守護者として名を馳せたアタナシオスの生き方とは合致しない。ヴァティカン写本の表題を記入した何者かは、アタナシオスの書簡を、「その大いなる神的熱意を顕示する諸書簡」と表している。ヴァティカン写本には、グリゴリオスのモデナ写本やライデン写本にあるような自伝は付されておらず、その本文は、総主教を辞して以降、首都の修道院に暮らしていたアタナシオスが1299年ないし1300年に、娘シモニスとセルビア王ステファン・ウロシュ2世ミルティンの結婚調整<sup>(32)</sup>のため首都を離れ、テサロニキに滞在していた皇帝アンドロニコス2世に宛てた書簡から始まる<sup>(33)</sup>。アタナシオスはその中で、皇帝に、首都への速やかな帰還と、小アジア西部で軍事行動を活発化させたトルコ人勢力への断固たる対応を強く求めている。

ヴァティカン写本のこの最初の書簡は、アタナシオスの書いた書簡の性質を端的に示すものである。ヴァティカン写本は「大いなる神的熱意を顕示する」書物とはいいいえても、「模倣と称賛に値する何か」を著者自身が誇示する書物とはいいいがたい。逆に、グリゴリオスの書簡集は「模倣と称賛に値する何か」を著者自身が誇示する書物とはいいいがたい。2人の総主教の書簡に関係する写本の数の相違が示すのは、少なくとも彼らの書簡集の存在を知る

人々にとっては、世俗的かつ知的な性質の書簡集のほうが、宗教的な性質の色濃い書簡集よりも魅力的であり、より多くの複写の制作に値したということである。これは、彼らにとって、グリゴリオスの書簡集は多く存在することが好ましく、アタナシオスの書簡集は若干あれば十分用が足りた、ということでもある。

## 2 ヴァティカン写本の制作をめぐる仮説

次にヴァティカン写本の制作について、これまでに提起された二つの主要仮説を確認しておこう。写本の制作年代はすでに述べたように、14世紀前半と推測されている。ただし、アタナシオスが1309年に総主教を辞任した後、正当な裁きを求める彼の求めに誰かが耳を貸すことを「長年待った」と述べる書簡（タルボット版の115番）と、おそらくは死の直前、大病から一命をとりとめた後に弟子たちのために書いた遺言書がそれに含まれることから、ヴァティカン写本は1309年のしばらく後、アタナシオスの死の直前かそれ以降に制作されたと考えられる<sup>(34)</sup>。

ヴァティカン写本は羊皮紙を素材とし、縦240ミリ、横161ミリ、見返しの白紙を除き、274フォリオからなる。白紙フォリオ（90フォリオ表から92フォリオ裏、99フォリオ裏）によって全体が三つの部分<sup>(35)</sup>に区分され、それぞれの部分の筆跡が異なることから、タルボットはその制作の状況について次のように述べている。「V〔ヴァティカン写本〕がアタナシオスの死から程なく、その弟子の3名によって作成されたことは大いにありうる。おそらくこの作者たちは、見出しうる総主教の書簡をすべて集め、歴史記録としてではなく、靈感を与える読書に用立てようと集成を物したのである」<sup>(36)</sup>。

タルボットは写本が関係する具体的な場所には言及していないが、明らかにアタナシオスの周辺を想定している。アタナシオスと縁のある場所はアトスやガリシオンなど帝国内に様々あるが、この場合もっとも有力なのは、コンスタンティノーブル市内南西のクシロフォス丘に位置した、メガス・ロガリアスティスの修道院であろう<sup>(37)</sup>。そこは、アタナシオスが1280年代前半、トラキア東部のガノス山からコンスタンティノーブルへ移動した後、皇帝アンドロニコス2世から居住地として授与された修道院である<sup>(38)</sup>。アタナシオスが二度の総主教辞任の

後にひっそりと暮らし、その長い生涯を閉じたのも<sup>39)</sup>、彼を師父と仰ぐ修道士たちが暮らし、3年間の埋葬によっても腐敗しなかったとされる彼の遺体を棺に納めて聖堂に安置し、崇敬の対象としたのもこの修道院である<sup>40)</sup>。したがって、亡くなった師父を偲び、彼を手本に生きようとする弟子たちが発案者であったとすれば、ヴァティカン写本は同地で制作され、その図書室に保管され、その修道士らによって読書された可能性が高い。

このように、ヴァティカン写本の場所をアタナシオスの身近な生活環境と結びつけるタルボットの仮説は写本の賛美的な表題とも合致し、一見もっともらしく思われる。けれども別の場所で詳しく論じたように、それにはいくつかの無視できない問題点がある。たとえば、ヴァティカン写本は、アタナシオスが皇帝を特定の問題について強く叱責したり、執拗に協力や解決を求めたりする内容の書簡や、明らかな欠損部のある書簡や、さらには府主教の選出時に送付する定型文的な書面をも含んでおり、タルボットの想定とは逆に、残存するすべての書簡を網羅した「歴史記録」としてそれを特徴づけることも可能である。

これに関連する問題は、写本の数とその保存場所の相違である。アタナシオスの書簡の主要写本というものはヴァティカン写本とアレクサンドリア写本のみであり、今日それらはヴァティカンとアレクサンドリアに位置する。この二つとも14世紀のコンスタンティノープルで制作された可能性が高いが、ヴァティカン写本は16世紀前半のローマに現れ、一人の枢機卿の持ち物となり、アレクサンドリア写本は1526年にアレクサンドリア総主教ヨアヒム（在位1487-1567年）の持ち物となった<sup>41)</sup>。一方、15世紀から17世紀の間にヴァティカン写本から直接転写された副次写本もすべて、コンスタンティノープルの外部、フランス（パリ：Paris. Suppl. gr. 42, Parisinus gr. 137, Parisinus gr. 1351A）とイタリア（ヴァティカン：Ottobonianus gr. 93, ナポリ：Neapolitanus gr. II B26）に位置する<sup>42)</sup>。つまり、アタナシオスの複数の書簡を含む写本はすべて、末期ビザンティン帝国の領域の外部で保存されている。それらは、膨大なギリシャ語写本を所蔵するアトスの諸修道院においても、パトモス島の聖ヨハネ修道院においても確認されていない。

彼の書簡集のいくぶん偏った分布と好対照をなす

のは、アタナシオスの死後、彼を記念する目的で書かれたテキスト群の分布である。それらは、ストゥディオスのテオクティストスによる伝記、賛辞（エンコミオン）、演説（ロゴス）、記念文（シナクサリオン）、聖歌（カノン）、司祭修道士イグナティオスによる記念文（アコルティア）、ヨシフ・カロテトスによる伝記などである<sup>43)</sup>。これらのテキストを含む写本は、大きく三つの系統に分かれる。一つは、16世紀後半にコンスタンティノープル総主教を二度務めたミトロファニスが入手し、ハルキ島（プリンス諸島の一つ、ヘイベリアダ島）の聖三位一体修道院の蔵書とした一写本（Const. Chalc. mon. 64；14世紀）<sup>44)</sup>であり、これにはテオクティストスによる伝記、賛辞、演説、記念文、聖歌と、イグナティオスによる記念文、そして作者不明の短い記念文が含まれている。もう一つは、アトスの大規模修道院の一つ、イヴィロンにある一写本（Iveron 50；14世紀）であり、これにはテオクティストスの伝記、賛辞、記念文と、イグナティオスによる記念文が含まれている。最後は、アトスのパントクラトル修道院に保存されているヨシフ・カロテトスの著作集（Pantokratoros 251；14世紀）であり、カロテトスが書いたアタナシオスの伝記はここに含まれる<sup>45)</sup>。これら三つをアタナシオスの記念的テキスト群の主要写本とすれば、それらが今日位置するのはイスタンブールとアトス山の二箇所、いずれも末期ビザンティン帝国の領域の内部である。注目すべきは、ハルキ島の写本の内容がアタナシオスの記念的テキスト群に限定されること、そして、ハルキ島の写本とイヴィロンの写本の内容が部分的に重複することである。テオクティストスはアタナシオスを記念する五種のテキストを書いているが、アタナシオスの死後、こうしたテキストをもっとも強く欲したのは、アタナシオスの修道院に暮らす修道士や修道女であったろう。タルボットは、ハルキ島の写本がもともとはアタナシオス修道院の蔵書であった可能性を示唆しているが<sup>46)</sup>、アタナシオスの死後、その奇跡の評判によって同院が外国人にも有名な巡礼地となっていたことを考えれば、それは十分ありうることである<sup>47)</sup>。一方、二つの写本の内容の重なりは、アタナシオスの修道院の修道士たちが欲したに違いないテキストを、アトス山のイヴィロン修道院に暮らす修道士たちも欲し、実際、何らかの方法によってそれらを入手したことを示す。アトスには今日



も、イヴィロン修道院に属するアタナシオスの小庵（スキティ）があり、その近くにはアタナシオスがかつて隠者として暮らしたと伝えられる洞窟がある。いつ始まったのかは定かではないが、イヴィロンにおけるアタナシオス崇敬は今日まで持続している<sup>(48)</sup>。14世紀の半ばには、総主教を辞任したカリストス（在位 1350-53 年、1355-63 年）がアタナシオスの修道院に隠退しているが、彼は総主教就任の前、イヴィロン修道院の院長を務めていた。このような 14 世紀から今日にいたるまでのイヴィロンとアタナシオスの明確なつながりは、アタナシオスがアトスに滞在していた時期、イヴィロンに属する修道士であったことを強く示唆する。

イヴィロンの事例から確認されるのは、アタナシオスへの崇敬は実際に記念的テキストの作成ないし獲得をともなったことである。ここから、アタナシオスに対する崇敬が連綿と続く場所、すなわちイヴィロンに、アタナシオスの書簡の写本がなぜ存在しないのか、という困難な問題が生じる。ヴァティカン写本はなぜ、イヴィロンではなく、ヴァティカンにあるのか。アレクサンドリア写本はなぜ、イヴィロンではなく、アレクサンドリアにあるのか。ヴァティカン写本に直接由来する副次写本は、なぜ、すべてヨーロッパにあるのか。イヴィロンの事例に即していえば、同院の修道士たちはアタナシオスの書簡集の存在を知らなかったか、知っていたとしても、複写を取り寄せる必要を感じなかったのであろう。おそらく彼らのアタナシオス崇敬にとって、アタナシオスの書簡集の重要度はそれほど高くはなかったのである。

もちろん、これは一つの推測に留まる。イヴィロンにアタナシオスの書簡の現存する主要写本ないし副次写本に匹敵する写本があった可能性は否定できない。売却、盗難、紛失、焼失など、写本の保管には種々の障壁が存在するからである。アタナシオス修道院の場合、事情はより複雑である。というのも、オスマン朝によるコンスタンティノープル征服後、同院は記録から姿を消してしまったからである。一部の研究者は、アタナシオスの修道院をイスタンブールの特定のモスク、具体的にはイサ・カプ・メスジディと同定しているが<sup>(49)</sup>、聖ソフィア教会やコーラ修道院の例とは異なり、そこがかつてアタナシオス修道院であったと断言するに足る証拠は存在しない。確実にいえることは、オスマン朝の支配下、

アタナシオス修道院がモスクに改造されるか、取り潰されるかして、消滅したことである。その消滅の折、蔵書は破棄、売却、あるいは持ち出しによって散逸したであろう。ヴァティカン写本がアタナシオス修道院の蔵書であった場合、それはコンスタンティノープルの近くであろうと遠くであろうと、どこへでも行きえた。

タルボットの仮説には別の問題も存在する。一つは、ヴァティカン写本の第 3 部、100 フォリオから最後のフォリオまでの筆跡の持ち主である。タルボットが「より大きくより大胆」と特徴づけるこの筆跡を、パテダキスは、アタナシオス自身のそれであると主張した<sup>(50)</sup>。パテダキスの主張は、ヴァティカン写本の第 3 部の筆跡と、1261 年にガリシオンの修道院においてアタナシオスなる修道士によって制作された写本（Paris. gr. 857）の筆跡の比較にもとづくもので、筆者自身、別の場でこの問題を詳細に考察し、制作に約半世紀の隔たりがある両写本の筆跡は総主教アタナシオス自身のそれである可能性がきわめて高い、という結論に達した<sup>(51)</sup>。かりにパテダキスの提起したこの仮説が正しければ、アタナシオスは総主教辞任後のある時期、直接、自身の写本集の制作に関与したということになり、「アタナシオスの死から程なく、その弟子の 3 名によって作成された」とするタルボットの仮説は成り立たなくなる。

もう一つの問題は、ヴァティカン写本の第 1 部（1 フォリオから 89 フォリオまで）の写字生が、パヒメリスの史書に分けて引用されているアタナシオスの破門状を辞任状に改変し、写本に挿入していることである（タルボット版の 111 番）。よく知られているように、パヒメリスはその史書においてアタナシオスとその弟子たちに対し、きわめて辛辣な評価を下しており、パヒメリスとアタナシオスは政治的な立場や宗教的な信条において、ほとんど対極に位置していた<sup>(52)</sup>。パヒメリスがヴァティカン写本の制作時に存命であったかどうかはわからないが、かりに存命であったとして、書簡集の制作を企てるアタナシオスの弟子たちにその史書を気前よく貸し出したとはとても考えられないし、同様に、弟子たちの側も、当時の代表的知識人であったパヒメリスに、史書の閲覧を願い出るのは難しかったであろう。そもそも、パヒメリスによる同時代史の執筆は、存命中の人物へのあからさまな批判や関係者しか知り

えない秘密の暴露を含んでいることから、ユスティニアヌスや皇妃テオドラを痛罵するプロコピオスの『秘史』の伝統につらなる、個人的な事業であった可能性が高く、パヒメリスと交友のある教会人や知識人ならまだしも、アタナシオスの弟子たちが彼の事業のことを知っていたとは考えにくい。逆にいえば、発案者であれ写字生であれ、ヴァティカン写本の制作の関係者がパヒメリスの友人か彼に近い人であった場合、彼はパヒメリスの史書を参照しつつ、実際には存在しない書簡をたやすく捏造することができたであろう。

これらの問題点が示唆するのは、タルボットの想定反対、すなわち、ヴァティカン写本はアタナシオスの弟子ではない人々によって、アタナシオスへの崇敬のためでも「靈感を与える読書」のためでもなく、「歴史記録」として後世に残すために制作され、アタナシオスと彼の弟子たちの共通の居住地や彼の行いと徳がひととき強く想起される空間とは異なる場所において保管された可能性である。スペインの文献学者I・ペレス・マルティンによって提起された仮説はまさにこの方向に沿うものであり、彼女はヴァティカン写本の制作を当時のアーカイヴ事業との関連で解釈する。

ペレス・マルティンは総主教グリゴリオス2世の写本の伝来を体系的に分析する過程で、グリゴリオスの書簡の主要写本の一つがヴァティカン写本と密接な関係を持つことに気づいた。彼女が目にしたのは、グリゴリオスの自伝と215通の書簡とからなるモデナ写本である。モデナ写本とヴァティカン写本の形態の面で目立つ相違は、前者が自伝的序文を含むことのほか、その制作に10名近い人物がかかわっていることである。ラミアはモデナ写本の制作にかかわった写字生の1人を大教会聖職者ゲオルギオス・ガリシオティスと特定したが(193フォリオ裏から194フォリオ裏まで)<sup>53)</sup>、ペレス・マルティンは別の2人の写字生を特定した。すなわち、1315年5月から19年5月まで総主教を務めたヨアンニス・グリキス(7フォリオ表から11フォリオ裏ほか、およそ150フォリオ分)および一時期彼の学生であったニキフォロス・グリゴラス(190フォリオ表から191フォリオ表)である<sup>54)</sup>。彼女のこの指摘は、自身が総主教に就任する前のグリキスから個人的に教えを受けていたというグリゴラスの自伝的報告を裏づけるものといえる<sup>55)</sup>。また、グリ

ゴラスが郷里のイラクリアから首都に移住したのが1310年代前半であることと、グリキスが死去したのが1319年の総主教辞任から間もない時期であることから、モデナ写本の制作が1310年代に位置するのはほぼ確実である。

モデナ写本とヴァティカン写本の関係を示す証拠としてペレス・マルティンが目にしたのは、写本のサイズおよび筆跡と、8フォリオを一つの折丁とするクワイアである。両写本のサイズは縦約24センチ、横約16センチとほぼ同じである。さらに彼女は筆跡の比較にもとづき、ヴァティカン写本の第1部の写字生を、モデナ写本の制作にも関与したゲオルギオス・ガリシオティスと特定した。クワイアについては、モデナ写本の自伝部の1クワイア(1フォリオから7フォリオ)を除く、計24のクワイアに付された35(λε')から58(νη')までの数字とヴァティカン写本のクワイアの当初の総数34が連続する<sup>56)</sup>。これらを証拠として、アタナシオスとグリゴリオスの大量の書簡を集成した一冊の書物を作る計画が総主教グリキスの指揮下で実行に移されたが、ある段階で当初の計画が変更された結果、二人の総主教の書簡集は一冊の書物ではなく、二冊の独立した書物、すなわち今日のヴァティカン写本とモデナ写本として仕上げられた、と彼女は主張する。つまり彼女によれば、両写本の制作は、総主教座に関係する歴史資料の保存を目的とした公的事業として企図されたのであり、「グリキスの選出後、すなわち厳格なアタナシオスと腐敗したニフォンの文化的には不毛であった総主教時代の後、聖ソフィアが享受した文化的活動の反響」<sup>57)</sup>と解することができる。

ヴァティカン写本とモデナ写本の連続性を説得的に示し、そこに総主教であるヨアンニス・グリキスやゲオルギオス・ガリシオティスの関与の跡を見出したペレス・マルティンの仮説は、タルボットの仮説よりも大きな説得力を持つし、魅力的でもある。彼女の仮説が妥当であるならば、ヴァティカン写本が制作されたのは総主教座の写字室であり、保管されたのはその図書室ないしアーカイヴであったと理解できる<sup>58)</sup>。この仮説は、ファイェによって提起されたヴァティカン写本の一通の偽書の問題とも整合する。偽書、すなわちアタナシオスの捏造された辞任状を含むヴァティカン写本の第1部の写字生は、ペレス・マルティンによれば、大教会聖職者のゲオ

ルギオス・ガリシオティスである。ヴァティカン写本およびモデナ写本の制作の発案者が総主教のグリキスであったとすれば、職務上、総主教と身近なガリシオティスが彼のプロジェクトに参加することは十分ありえた<sup>59)</sup>。一方、ガリシオティスは大教会聖職者として、歴史家パヒメリスとも接点を有していた。ガリシオティスは1310年ごろ、大教会の法廷裁判長（プロテクディコス）に就任し、別の職位（サケリオン）に就く1334年までこの職位の保持者であったとされるが、パヒメリスも大教会のプロテクディコスとして知られている。つまり、ガリシオティスとパヒメリスは一時期大教会の同僚であり、異なる時期に同じ職位に就いていた。かりに両者が交友関係を持っていれば、ガリシオティスはパヒメリスの史書のことを知っていた可能性が高く、ヴァティカン写本に偽書を挿入するに際して、彼は、アタナシオスの弟子の修道士よりも容易に、パヒメリスの史書を参照しうる立場にいた。両者の親密な関係がなかったとしても、プロジェクトの発案者であるグリキスはその教会における最上の地位によって、実際の作業者の一人であるガリシオティスに、パヒメリスの史書を提供しえたであろう。パヒメリスの史書がどこで保管されていたのかは定かではないが、ガリシオティスがこの文献を総主教座の図書室ないしアーカイヴで参照したと想定することも可能である。

けれども、ペレス・マルティンの新たな仮説には二つの難点がある。一つは、アタナシオスがシモニアの嫌疑を受け、宗教的な処罰を受けた総主教であったという、資格に関する問題である。おそらく彼は1309年の辞任後、反対勢力が多数を占める教会会議の決議によって、聖務資格を停止ないし剥奪されていた。彼が世俗の請願担当長官に宛てた書簡（タルボット版の115番）からは、彼が死のほぼ直前まで自らの名誉回復を求めていることが読み取れるが、彼の生前は無論、死後もすぐに名誉回復された形跡はない<sup>60)</sup>。つまり、アタナシオスは何らかの過失から処罰された教会人として、教会の記念の対象からは除外されていた可能性が高く、皇帝への明け透けな批判や叱責をも含んだその書簡が、現役の総主教であるヨアンニス・グリキスの主導で集成されたと想定するのは、不可能ではないにせよ困難である。

もう一つは写本制作の年代である。彼女は、ヴァ

ティカン写本およびモデナ写本の制作を1315年5月のグリキスの総主教就任の後に位置づけるが、その確たる証拠は存在しない。確かに、ヨアンニス・グリキスが総主教として、記録の作成ないし資料のアーカイヴ化に気を配っていた証拠は存在する。その最たるものは、コンスタンティノープル総主教の行政と大教会内で頻繁に開催された会議（常設教会会議／シノドス・エンデムサ）の記録簿である。約1世紀間の総主教の行政文書と教会会議の決議が年代順に集成されたこの記録簿は、ビザンティン教会の史料としては他に類例のないものである<sup>61)</sup>。その最初の文書は、グリキスが総主教就任の日、5月12日に皇帝アンドロニコスらのために読み上げたと思われる祈祷文であり、最後はマテオス1世（在位1397-1402年、1403-10年）が1402年1月に発行した文書である。そこにはグリキスの4年間の在位期だけで約60点の文書が収録されている。グリキス以前の時代については、総主教の公的通知も日々の教会会議の決議も、部分的にしか伝わっていないことから、総主教位に就いたグリキスが、従来は存在しなかった総主教座のアーカイヴ事業を開始するとともに、それが自身の在位期以後も持続するよう何らかの措置を講じたのは明らかである。内容の性質は多少異なるとはいえ、総主教座の行政関連資料のアーカイヴ化と、最近在位した2人の総主教の書簡集の作成はいずれも、歴史記録の作成および重要資料の保存という共通の意図を反映しており、それぞれにグリキスが深く関与した痕跡がある。けれども、かりにヴァティカン写本の制作がグリキスの総主教就任の前になされていたとすれば、それは必ずしも総主教座の公的な事業であったとは主張できなくなる。

ヴァティカン写本およびモデナ写本の制作は、グリキスの総主教就任の前なのか、それとも後なのか。二つの写本の連続性がこの問題への手がかりとなる。すでに触れたとおり、モデナ写本の24のクワイアに35から58までの数字が記入されており、これはグリゴリオスの書簡が24のクワイアに書写される前に、アタナシオスの書簡の計34のクワイアへの書写が完了していたことを意味する。アタナシオスとグリゴリオスの書簡が1クワイアから58クワイアまでを構成する一冊の書物がなぜ作られず、それぞれ当初の計画にはなかったと思われる付加的クワイアを有する二冊の書物が作られたのか。



これらの写本制作にかかわった人々の想定していなかった事態が、作業中に生じたためというのが、もっとも妥当な解釈であろう。ヴァティカン写本の第1部の末尾にある書簡（タルボット版の113、114、115番）は、アタナシオスが1309年に総主教を辞任してしばらく後、総主教不在の時期に書いたものである。一方、付加的なクワイアである第2部には、アタナシオスの遺書的な書簡（97フォリオ裏から99フォリオ表）が含まれている。これらが示唆するのは、アタナシオスが、1クワイアから58クワイアまでが連続する写本の完成する前に、また、グリキスが総主教に就任する前に、死の到来を予期して遺書を認めたか、遺書の執筆から程なく死去した可能性である。かりに、ヴァティカン写本の制作がグリキスの総主教就任の前に企図されていたならば、プロジェクトは必ずしも公的であったとはいえず、グリキス以外の発案者ないし主導者がいた可能性も生じる。

### 3 ニキフォロス・グリゴラスの『ローマ史』 ——記述と状況

ヴァティカン写本の場に関連して、いくつかの重要な手がかりを与える史料は、ニキフォロス・グリゴラスの『ローマ史』である。グリゴラスは14世紀のビザンティン帝国の代表的知識人の一人であり、その知的関心と業績は、修辞学、哲学、神学、天文学など多方面に及ぶ。彼の数ある著作の中でかねてから注目され、もっとも頻繁に参照されているのが、『ローマ史』の表題を有する長大な歴史書である。グリゴラスは、十字軍勢力がコンスタンティノープルを占領した年（1204年）から、彼自身の没年に近い1360年ごろまでの「ローマ人の帝国」の歴史を、彼自身の体験や伝聞を織り交ぜつつ、精細に記述している。彼の歴史書は、皇帝ヨアンニス・カンタクジノスが晩年に著した回想録的史書とともに、14世紀中葉のビザンティン史と、とりわけグリゴラスの目から見たヘシカスト論争の歴史を学ぶための基本史料とみなされている<sup>62</sup>。

この『ローマ史』の中には、総主教アタナシオスに関するまとまった記述がある。皇帝アンドロニコスの治世前半を扱った第6章の第5節がそれに当たる。この箇所はアタナシオスに関する主要な同時代証言の一つとみなされているが、ここで特別な注意を払って分析するに値するものである。グリゴラ

スがいつ、どこで、いかなる種類の史料を参照し、いかなる情報を入手したのかという、歴史を書く側の状況に関する問いに対して、十分な答えはいまだ提示されていないけれども、ペレス・マルティンの考察が正しければ、自らの教師ヨアンニス・グリキスらとともに総主教グリゴリオスの書簡集（モデナ写本）の制作に写字生として関与したグリゴラスはその作業と同じ時期に、同じコンセプトで制作されたヴァティカン写本の存在を知っていた可能性が高く、グリゴラスの記述とその状況の分析は我々にヴァティカン写本の場合の道を開くかもしれない。

グリゴラスは1290年代前半に小アジア北西の都市イラクリアに生まれ、1310年代前半あるいは半ばにコンスタンティノープルに移り、メトヒティスによる修復以前のコーラ修道院に定着したとされるので<sup>63</sup>、アタナシオスが総主教位にあった時期、彼は年少であったうえ、アタナシオスに接する機会も持たなかったと思われる。ただし、彼には出身地のイラクリアの府主教を務める叔父ヨアンニスがあり、彼は幼い時分に両親を亡くした後この叔父に養育されていたので、彼は地方都市に暮らす一般の人々よりも、アタナシオスのことをよく知っていた可能性もある。

けれどもその記述を実際に読むと、グリゴラスが伝聞や思い出ではなく、特定の史料に依拠していることが直ちに明らかになる。

子供のころから禁欲の仕事に勤しみ、このときまでガノスの山岳で静寂の生活を送っていたアタナシオスという名の修道士が、総主教位を継承した。この人は文学的な素養と政治的な感覚を欠いてはいたが、善良であり尊敬に値した。というのも彼は自制心を有し徹夜の祈りにも熱心で、修道生活を完遂したからである。彼は地面に眠り、足を洗わず、いつも徒歩で往来し、山岳や洞窟に単独で暮らす人々に優れてふさわしい性質を持っていた。この人はかりにずっと独りで生きたならば、生涯幸福でいられたように思われる。しかし、その他の主教は高位の聖職者とともにひどい仕打ちを受け、彼らのかつての悪事、とくに総主教グリゴリオスに対する悪事に見合った恐怖を見出すことが必然であったようだ。彼は総主教位に就くとすぐさま、荒々しく、神的な熱意と辛辣さに満ちた視線を

彼らに向けた。すると、開始線ともいうべき最初から、起こりうることを予期したより賢明な人々は、希望にそぐわない事態に不本意ながら応じるよりむしろ率先して家でひっそりと暮らしたが、その他の人々はすぐ後に、いわば帝都からの追放を余儀なくされた<sup>64)</sup>。

グリゴラスのアタナシオスに対する評価は全体的に好意的である。彼はまず、アタナシオスの出身と生活スタイルに簡単にふれ、彼が1289年の総主教就任と同時に、キプロスのグリゴリオスの神学的教説に強く反対し、その撤回および辞任を求めた高位聖職者らに対して厳格な姿勢をもって臨んだと記す。問題となるのは、これに続く記述である。

同様のことは多くの主教にも降りかかった。彼らの数はきわめて多く、みな教会の法と慣習を熟知した高位の人々であった。彼が旧来の慣習を尊重したのか、自らの改善の希望にもとづいて努力したのかはわからないが、総主教グリゴリオスは、彼らがその下にいる人々〔信者〕の聡明な教育者や指導者となるよう、敬虔さの頑強な導き手となるよう、すなわち、必要があれば、対抗する言葉の大波への不動の防壁となるよう、多大な努力を払った。しかし彼〔アタナシオス〕は実際に、様々な必要を理由としてコンスタンティノーブルに滞在していた人々をそれぞれの都市へと送り返し、そこで彼らの生活をまっとうさせた。平和の教師であるべき彼らがかの地に居座り、互いにそして彼自身に謀略を企てることを欲しない、と彼は語っている(φησι)。そこで敬虔なる教義が一つずつ確認され、その間に発生した教会の問題が解決されるよう、神聖なる教会会議のカノンが年に一度ないし二度の府主教会議の開催を総主教に定めていることを口実に、彼らは事実、別の場所からやって来るのであるが、彼はコンスタンティノーブルへの入市を禁じた。これは立派な行いだった。彼が述べるには(λέγων)、正しいのは、総主教が帝都でそうあるように、各人が割り当てられた地区の牧人であること、各人が各人の羊をすぐそばで世話すること、そして、帝都に集まって利益ばかりを追求めないことである。とにかくこの問題に関しては、必要を越え

る過剰な攻撃によって共倒れに終わってれば、両者はしかるべく批判されたかもしれない<sup>65)</sup>。(強調は引用者)

総主教位に就いたアタナシオスが直面した問題の一つは、教区を離脱して首都に長期滞在する主教の存在であった。これは宗教改革の時期に西ヨーロッパ世界でも表面化した、主教居住地の問題である<sup>66)</sup>。教会の法は主教が任じられた教区を正当な理由なく長期間不在にすることを禁じていたにもかかわらず、多数の主教が首都に邸宅を構えて長期滞在することがかねてから慣例化しており<sup>67)</sup>、アタナシオスは総主教として、敢えてこの問題の解決を試みたのである<sup>68)</sup>。グリゴラスは、アタナシオスが、コンスタンティノーブルに滞在していた主教らをすべて各々の教区へと送り返したと、アタナシオスの発言を引きながら説明する。主教団が首都に留まるための具体的な口実が紹介され、彼の発言を引用するために、「彼は語る(φησι)」と「彼は述べる(λέγων)」という二つの動詞が使用されている。いずれも三人称単数、現在時制の活用である(前者は直説法、後者は分詞)。かりに伝聞にもとづいてこの内容を記していたならば、グリゴラスは「彼は語った」あるいは「人々は述べている」という種の表現を用いたであろう。つまり、三人称単数の現在時制の選択は、彼が執筆に際して何らかの史料を手元に置き、それを直接参照したことを強く示唆する。そうすると、この史料とは一体何であったのか、という問題が生じる。一つの可能性は、アタナシオスの同時代人であり、大教会聖職者でもあったゲオルギオス・パヒメリスの歴史書である。グリゴラスは1320年以前の記述に関しては、皇帝と総主教がその居住地を小アジアのニケーアに置いた時期(1204-61年)を対象とするゲオルギオス・アクロポリティスの史書<sup>69)</sup>と、パレオロゴス朝初期の2人の皇帝、ミハイル8世とその長男アンドロニコス2世の治世(後者については、1306年夏まで)を対象とするパヒメリスの史書を主要史料として用いている<sup>70)</sup>。大教会の高位聖職者として総主教に日常的に接し、その思想と政治手法に嫌悪感を募らせていたに違いないパヒメリスは<sup>71)</sup>、アタナシオスについて詳細かつきわめて辛辣な記述を彼の何通かの書簡の引用とともにその作品に含めているが、主教居住地の問題に関しては、アタナシオスの側の根拠を明

示せず、この問題に関連する彼の書簡も引用していない。つまり、グリゴラスの上の詳細な記述は、彼自身の体験と伝聞にもパヒメリスの史書にもとづかないと判断することが可能であり、グリゴラスが、アタナシオスが単数一人称ないし複数一人称で語る書簡テキストを何らかの方法で参照した可能性がもっとも有力となる。

グリゴラスが、まとまった量のアタナシオスの書簡を参照できたとすれば、彼が手に取ったのはアタナシオスの書簡集の書物、すなわち、現存するヴァティカン写本、アレクサンドリア写本、あるいは、未確認の別の写本のいずれかであった可能性が高い<sup>(72)</sup>。すでに確認したとおり、アタナシオスの写本は、キプロスのグリゴリオスのそれに比べて少数であり、当時、グリゴラスが参照しえたような、ヴァティカン写本と同規模あるいは重複の多い写本が制作され、今日までのある時点で散逸した、あるいは未発見のままに留まっているという可能性は考えにくい。グリゴラスによるアレクサンドリア写本のための参照の可能性も低く、これは、同写本とヴァティカン写本の間の収録書簡の相違のためである。すなわち、ヴァティカン写本の後半部から選択的に複写され、おもに修道士と聖職者を宛先とする書簡からなるアレクサンドリア写本には、主教居住地の問題に関する書簡がほとんど収録されておらず、我々はアレクサンドリア写本を読む限りでは、アタナシオスがこの問題の解決に心血を注いでいたことも、彼の意図や根拠も詳しく知りえないのである。

二つの写本のうち、グリゴラスの記述との間に明白な対応が確認できるのは、ヴァティカン写本であり、このことはグリゴラスの次の引用によっても支持される。「不正を犯す者に対する彼の怒りは、このように非常に激しくあからさまであったために、生まれによって皇帝に連なる縁者のみならず、皇帝の子供たちまでも、彼の率直な物言いと詰問を皇帝のそれ以上に恐怖した」<sup>(73)</sup>。ヴァティカン写本には、皇帝アンドロニコスだけでなく、その妻イリニ＝ヨーランダや、アンドロニコスの長男ミハイル9世やその妻マリア＝リタへの書簡も含まれるが、アレクサンドリア写本にこれらの書簡は皆無である。二つの史料の間には、引用文の重複も見られる。グリゴラスは詩篇（セプトゥアギンタ、84章12節）を引用してアタナシオスを称える。「この総主教のもとで、〈真理が地から萌えいで、正義が天から注が

れ〉、すべての美しき希望が実現した」<sup>(74)</sup>。一方、アタナシオスはヴァティカン写本の請願担当長官宛の書簡（タルボット版の114番）で、詩篇の同じ箇所を引用する。「〈真理が地から萌えいで、正義が天から注がれ〉」、そしてキリストが良いものをもたらし（中略）ということこそ誰も否定しない」<sup>(75)</sup>。グリゴラスはアタナシオスを真理と正義の実現者として提示するため、アタナシオスは請願担当長官に対し、自らを真理と正義の希求者として提示するために、詩篇の同じ箇所を引用している。この重複は偶然であるとはいえない。

いずれにしても、グリゴラスの『ローマ史』の記述にはヴァティカン写本と思しき史料との接点らしきものが確認できる。続いて、グリゴラスが参照したヴァティカン写本と思しき史料の場に考察を進めよう。すでに述べたとおり、グリゴラス自身に関係する場所はコンスタンティノーブルのコーラ修道院である。この修道院はグリゴラスが1310年代にコンスタンティノーブルに移住して以来、1360年前後に死去するまで、約半世紀にわたって居住した場所であり、彼が『ローマ史』も含め、その著述のほとんどを執筆した場所とみて間違いない。それでは、『ローマ史』中のアタナシオスの記述はいつ、いかなる状況下で書かれたのか。この問題を解く鍵は再びその記述に含まれている。グリゴラスはアタナシオスによる修道生活の改革について詳述した後、次のようにいう。

もし彼のあの規則と模範が彼以降の後継者らによって同じように維持されていたなら、その価値は大きかったであろうが、実際にそうであったのは彼が総主教の地位にいる間だけだった。もし彼がもう少し長く総主教を務めていたならば、修道生活の習慣の改革は定着したかもしれないし、少なくとももっと持続しただろう。けれども彼は途中で、しかもきわめて早くに去ったため、まさに陶片が裏返ったかのように、恐ろしい悪意の病が聖なる修道院に再度蔓延した<sup>(76)</sup>。

アタナシオスの修道院改革を称揚する一方で、彼の辞任後の修道生活を痛烈に批判するこの記述は、グリゴラスの後半生に生じた、一部の修道士勢力との熾烈な論争を想起させる。すなわちそれは、修道



霊性ヘシカズムの是非、そしてヘシカズムを支持した神学者グリゴリオス・パラマスの教説の是非をめぐって10年以上にわたって行われた、いわゆるヘシカスト論争である。南イタリアから到来した正教修道士、カラブリアのバルラームによる辛辣なヘシカスト批判に端を発した論争の終盤、グリゴラスは彼自身の神学的信念にもとづいて、パラマスとその支持者に対抗する論陣を張った<sup>(7)</sup>。バルラームは1341年の教会会議でヘシカストとパラマスに対する自らの主張が拒絶されたことでイタリアへ去った。バルラームとパラマスの共通の友人であり、バルラームの離脱後は彼に代わってパラマス批判を繰り広げた修道士グリゴリオス・アキンディノスは1348年に死去し、当初からパラマスの教説に批判的であったグリゴラスは、これ以降、反パラマス派の中心人物となった。

ヘシカスト論争を長引かせた要因の一つは、幼帝ヨアンニス5世（在位1341-91年）を擁するパレオロゴス家と有力貴族ヨアンニス・カンタクジノスの内戦が論争と同時進行していたことである。カンタクジノスはパラマスを始めとするアトス山の修道士勢力から強く支持される一方、グリゴラスとも親交を持っていた。内戦と論争の同時進行は、反パラマス派のグリゴラスの立場を次第に悪化させていった。1347年1月にはヨアンニス5世の母、サヴォワ家出身のアンナがコンスタンティノープルで教会会議を開催し、反パラマス派の総主教ヨアンニス・カレカスを解任すると同時に、パラマスらに対する破門を解除した。こうして反パラマス派であったパレオロゴス家までもがパラマス派に立場を変えたことで、グリゴラスは、処罰を待つだけの身となった。同年2月、内戦に勝利したカンタクジノスの首都凱旋はグリゴラスへの処分のつかの間の延期をもたらしたが、グリゴラスはカンタクジノスの是認を得るための必死の努力もむなしく、1351年に開催された教会会議で断罪され、自宅であるコーラ修道院に幽閉された。

彼自身『ローマ史』の一部を幽閉の地、コーラで執筆したと述懐しているように、『ローマ史』の執筆が彼の晩年ないし後半生の仕事であることは間違いない。グリゴラスがこの作品の執筆を開始した時期について研究者の見解はわかれるが、アタナシオスに関する記述は彼の政治的運命の分岐点である1347年もしくは1351年以降に書かれた可能性が高

い。これが正しければ、反パラマス派の領袖である彼が歴史書の執筆のために市中を自由に往来するのは困難であったと考えられる。彼の政治的・物理的状況についての推測は『ローマ史』の執筆の状況についての別の推測を導く。行動の自由が漸次的に制限される状況においても、政治的な理由から外出が困難であったり不可能であったりする状況においても、彼は『ローマ史』執筆のために必要な文献の多くをコーラ修道院で閲覧できたのではないかと、そして、コーラ修道院の蔵書の中に、アクロポリティスやパヒメリスの史書とともに、ヴァティカン写本そのものが含まれていたのではないかと推測される。

#### 4 コーラ修道院とテオドロス・メトヒティス

こうしてグリゴラスの『ローマ史』を介する形で、ヴァティカン写本と思しき史料とコーラ修道院の接点がより明確に浮かび上がった。残された課題は、ヴァティカン写本と思しき史料ではなく、ヴァティカン写本そのものとコーラ修道院との接点を突き止めることである。

すでに確認したとおり、ペレス・マルティンは、ヴァティカン写本の制作を、1310年代後半に総主教を務めたヨアンニス・グリキスの公的な文化事業と結びつけた。彼女の考えでは、もともとは世俗の官僚でありながら、総主教となったグリキスは、総主教座のアーカイヴを充実させるべく、彼の教師でもあったキプロスのグリゴリオスと、アタナシオスの書簡集の制作を発案し、実行に移した。グリキスのこのプロジェクトには、彼の弟子であったニキフォロス・グリゴラスや、大教会聖職者ゲオルギオス・ガリシオティスらが写字生として参加した。ペレス・マルティンのこの仮説には、いくつかの無視できない難点があったが、グリゴラスの『ローマ史』もそれへの難点となりうる。グリゴラスは『ローマ史』の中でアタナシオスを記述するに当たって、ヴァティカン写本を一次史料として参照・利用した可能性が高い。けれどもペレス・マルティンが考えるとおり、ヴァティカン写本が総主教座のアーカイヴのために制作され、同じ施設の図書室に保管されていたならば、1347年以降、反パラマス派の中心人物とみなされ、1351年の教会会議で断罪されてからはパラマス派への批判と『ローマ史』の記述に没入したグリゴラスにとって、ヴァティカン写本は容易には接近しえない文献となっていたであろう。

ヴァティカン写本の場合をめぐる様々な間接的証拠の中でも、とくにグリゴラスとのリンクは、タルボットのそれとも、ペレス・マルティンのそれとも異なる、第三の可能性を我々に示唆する。それは、ヴァティカン写本およびモデナ写本の制作が、二人の総主教の書簡を保存するために、首都に住まう特定の知識人グループによって遂行された、公的ではなく、私的な事業であった可能性である。ここで再びコーラの名が、今度はテオドロス・メトヒティスの名とともに浮上する。メトヒティスは、確信的な教会合同支持者であったゲオルギオス・メトヒティスの息子として生まれたため、不遇の少年時代を送ったが、後に皇帝アンドロニコスにその才能を見出され、1300年代半ば以降は皇帝の側近中の側近として帝国政治を左右した人物である。グリゴラスがコーラとヴァティカン写本と思しき文献とを結び存在であるのに対し、メトヒティスはコーラとヴァティカン写本そのものを結びうる存在である。これには三つの間接的証拠、すなわち人間関係、時期的符号、書物への愛を挙げることができる。人間関係についてみれば、メトヒティスはヨアンニス・グリキスの年下の友人であり、おそらくは彼と頻りに書簡を交換する間柄であった。また、メトヒティスとグリゴラスの親密な関係もよく知られている。メトヒティスとグリゴラスの関係はまさにコーラを介したものであった。グリゴラスの居住地でもあったコーラは、もともと「帝国修道院」として知られていたが、ある時期、皇帝アンドロニコスからメトヒティスに授与された。メトヒティスは私財を投じて老朽化の著しいコーラを修復し、晩年はグリゴラスや他の修道士とともに同院に暮らした。メトヒティス自身がヴァティカン写本およびモデナ写本の制作に直接関与した証拠は確認されないが、写字生として実際に関与した人々の中には、メトヒティスの友人ないし関係者が含まれている。時期的符号とは、ヴァティカン写本の制作とメトヒティスによるコーラの修復事業の年代のことである。前者については1310年代の半ばであることがほぼ確実である。後者については、内装作業の終了が1321年であるのと修復の規模から、着工は写本と同じく、1310年代半ばか後半であったと推測できる。二つの仕事が時期的に重複ないし近接していたことは疑いない。最後、もっとも重要なのが、メトヒティスの書物に対する桁外れの愛情である。この愛情は帝国有数の

富裕者であったメトヒティスに、一つの文化的な野心を抱かせた。それは、可能な限り多くの書物を集め、保管し、希望者に閲覧させるという、世界と人類への貢献としての大図書館運営の夢である。後年、政争に敗れてトラキアの都市ディディモティホンに追放された彼は、コーラの状況を案じて同院の修道士らに書簡を送り、その圧倒的な財産に注意を促している。

私のために最高の富、つまりきわめて貴重な書物の倉庫を安全に、無傷のまま、まったく毀損のない状態に保ちなさい。私は賢明にもこの富を修道院に置いたのである。それは実に膨大で、別の場所に同規模のものがあるのかどうか私は知らない。神の怒りを引き起こしたり、野卑に見えたりする恐れがないのなら、私は言ったであろう。質と量の双方で、このような膨大な書物がかつてこの都市の他の修道院にあったかどうか私は知らない。これは修道院だけに必須のものではない。なぜならその有用性はあなた方自身の需要をも越えるから。それは学識ある人々から大いに望まれ、熱く欲されるものなのである。修道院のある者もときにはそれを有益と思うであろう。けれども常にそうであるのは大勢の部外者である。この品々の、この将来ずっと必要とされるであろう財産の、この惜しみなく大衆に分け与えたとしても尽きることのない宝物のあなた方への贈与のほかに、私の修道院への賢明なる貢献に発する慈善のいかなる業が人々に対するより大いなる効力ないし利益を持ったか、誇りのいかなる業が修道院により大いなる榮譽をもたらしたか、あなた方全員により大いなる尊厳と品位をもたらしたか、私はほとんど言うことができない。私自身のこの贈与とあなた方が司るこの委託を思い起こすたび、私はひそやかに喜ぶ。私はそれを毎日思い起こし、絶えず思慮する。絶えずというのは、あらゆる瞬間、あらゆる状況でそうしているからである。この世界の利益のためにかくも高貴な仕事を成し遂げたことを、そして、人類にかくも大きな貢献を果たしたことを思い出し、それに思いをめぐらせること、これは私にとって絶大な苦難における持続的な慰めの源である<sup>(78)</sup>。

1310年代の半ばないし後半、コーラの修復に乗り出したメトヒティスが、自らの資財を投じて、帝国に類例のない大図書館をそこに設置しようとしたことは明らかである。追放の地でメトヒティスが誇るこのコーラの図書館には、彼がそれまでに所有していた書物が移転されたのは確実であるし、開館に先立って、また開館後も継続して、多くの書物が新規に獲得され、所蔵されたのも確実である。注目すべきは、メトヒティスが修道士に対し、施設の人文主義的な性格を強調している点である。彼によれば、コーラの図書館は「世界の利益」のために、「人類への貢献」として開設され、神と学問を愛するすべての人々に開かれた施設である。こうしたメトヒティスの高邁かつ人文主義的な理想は、彼がコーラに、古今の書物を所蔵する図書館としての機能に加え、歴史資料を保存し後世に伝達するアーカイヴとしての機能も付与した可能性を強く示唆する。メトヒティスのコーラは、人々だけでなく、書物に対しても開かれていたはずである。おそらくこの類例を見ない、図書館でもありアーカイヴでもあるコーラが、総主教アタナシオスのヴァティカン写本にその存在の場を与えたのである。

## 【付 記】

本稿は、2007年10月20日に早稲田大学で開催された地中海研究所シンポジウム「ビザンティン写本研究の現在」における、筆者の同タイトルの報告を修正・展開したものである。シンポジウムの関係者および参加者の方々、とりわけ、2008年9月まで高等研究所の副所長を兼務されていた早稲田大学の益田朋幸教授に記して感謝申し上げたい。

## 注

- (1) A.-M.M. Talbot, *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople: Letters to the emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials* (Washington, D.C., 1975), no. 1 (p. 2): † Τοῦ ὁσίου πατρὸς ἡμῶν Ἀθανασίου πατριάρχου Κωνσταντινουπόλεως ἐπιστολαὶ πρὸς τε τὸν αὐτοκράτορα καὶ πρὸς ἑτέρους, πολὺν τὸν θεῖον ζῆλον ἐμφαίνουσαι.
- (2) 総主教アタナシオスについての基本的な研究は、A.-M. M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius (1289-93; 1303-09) and the Church', *Dumbarton Oak Papers* 27 (1973), pp. 7-33; J. L. Booijamra, *Church Reform in the Late Byzantine Empire: A study for the Patriarchate of Athanasios of Constantinople* (Thessaloniki, 1982); idem, *The Church and Social Reform:*

*The policies of the Patriarch Athanasios of Constantinople* (New York, 1993), etc.

- (3) アタナシオスの改革の政治的側面については、註2の文献のほか、拙論「コンスタンティノープル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機」(博士論文、京都大学、2006年度提出・受理)；「アルセニオス派のシスマ終結の背景について」、『プロジェクト研究』(早稲田大学総合研究機構)4号(2009年)、69-83頁；「ビザンツ帝国を救うべき新法——総主教アタナシオスのネアラについて」、鈴木秀光ほか編『法の流通——法制史学会60周年記念若手論文集』(慈学社出版、2009年)、467-499頁、2009年を参照。
- (4) 今日の正教暦におけるアタナシオスの記念日は10月28日である。A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium: The posthumous miracles of the Patriarch Athanasios I Constantinople by Theoktistos the Stoudite* (Brookline, Mass., 1983), p. 14 and note 14を参照。アタナシオスの聖人認定については、同書、pp. 21-30のほか、R. Macrides, 'Saints and sainthood in the early Palaeologan period', in: S. Hackel ed., *The Byzantine Saint* (London, 1981), pp. 67-87および拙稿「コンスタンティノープルの奇跡——総主教アタナシオスに注目して」、『アジア遊学』115号(特集・縁起の東西)、1998年、66-75頁を参照。
- (5) Gregorios Palamas, *Défense des saints hésychastes: Introduction, texte critique, traduction et notes*, ed. J. Meyendorff (Louvain, 1959), vol. 1, p. 99: 「非常に長い間総主教の座を飾り、神がその棺を称えたアタナシオス」。ヘシカズム(hesychasm、ギリシャ語ではήσυχασμός)は13世紀末から14世紀にかけてビザンティンの修道院世界で隆盛し、程なく正教スラヴ世界にも普及した神秘主義的な霊的な運動であり、「イエスの祈り」の継続的実践により神との合一を目指した修道士はヘシカスト(hesychast、ギリシャ語ではήσυχαστής)と呼ばれる。パラマスの思想およびヘシカズムの技法については、J. Meyendorff, *Introduction à l'étude de Grégoire Palamas* (Paris, 1959)のほか、大森正樹『エネルギーと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究』(創文社、2000年)；久松英二『祈りの心身技法——十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』(京都大学学術出版会、2009年)などを参照。アタナシオスとヘシカズムのかかわりについては、拙稿「アトス山の静寂——総主教アタナシオスとビザンティン・ヘシカズムの接点」、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西——語られる縁起』(勉誠出版、2011年)を参照。
- (6) 法制面での試みについては、拙稿「ビザンツ帝国を救うべき新法」を参照。
- (7) アタナシオスの書簡および写本の諸問題については、E. Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (1289-1293, 1303-1309): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil. Thesis, The University of Oxford, 2004)のほか、拙稿「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か——パリ・ギリシア語写本857番とビザンツの修道院文化」、『史林』90巻4号(2007年)、93-115頁；「声を救う——アタナシオス書簡集の起源について」、『早稲田大学高等研究所紀要』創刊号(2009年)、5-41頁；「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡——マノリス・パテダキスの新説を吟味する」、『オリエン』51巻2号(2009年)、116-139



頁を参照。

- (8) この写本の書誌については、Talbot, *The Correspondence*, pp. xxxiii-xxxvii; S. Lilla, *Codices vaticani graeci: codices 2162-2254* (Vatican, 1985), no. 2219 を参照。
- (9) A.P. Kazhdan et al. eds., *The Oxford Dictionary of Byzantium* (New York and Oxford, 1991), s.v. 'Book trade' (Wolfram Hörander)。
- (10) R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin, p. 1, Le siege de Constantinople et le Patriarcat oecuménique, t. 3: Les églises et monastères* (2<sup>nd</sup> ed., Paris, 1969), pp. 430-440; N.X. Eleopoulou, *Η Βιβλιοθήκη και το Βιβλιογραφικόν Εργαστήριον της Μονής των Στουδίου* (Athens, 1967) を参照。
- (11) Cf. *Byzantine Books and Bookmen: Dumbarton Oaks Colloquium, 1971* (Washington, D.C., 1975); K.Sp. Staikos, *The History of the Library in Western Civilization*, vol. 3: *The Byzantine World From Constantine the Great to Cardinal Bessarion* (New Castle, 2007)。
- (12) コーラ修道院についての基本文献は、R. Janin, *Les églises et monastères*, pp. 531-539; P. A. Underwood ed., *The Kariye Djami*, 4 vols. (London, 1967-75); R.G. Ousterhout, *The Architecture of the Kariye Camii in Istanbul* (Washington, D.C., 1987); idem, *The Art of the Kariye Camii* (London, 2002), etc.
- (13) 拙稿「声を救う」、25 頁。
- (14) W. Lameere, *La tradition manuscrite de la correspondance de Grégoire de Chypre, patriarche de Constantinople* (Bruxelles, 1937), p. 187. 拙稿「声を救う」、9-10 頁も参照。グリゴリオスの自伝については拙稿「学びの果て——ビザンティン哲学者の自伝と自負」、森原隆編『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』(成文堂、2010 年)、297-312 頁、とくに 311-16 頁を参照。
- (15) 拙稿「声を救う」、5 頁。
- (16) タルボットの版のもと、彼女がポーランド出身の高名なビザンティン史家 I・シェフチェンコの指導下で作成し、1970 年にコロンビア大学に提出した博士論文。
- (17) 両者の仕事については、拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて」を参照。
- (18) サルヴィアティの名は 273 フォリオ裏に 'Io. Car. de Salvati' として現れる。サルヴィアティが枢機卿に任じられたのは 1517 年であるため、彼がヴァティカン写本を手に入れたのは 1517 年以降と考えられる。Talbot, *The Correspondence*, p. xxxiii. Cf. A. Cataldi-Palau, 'La biblioteca del Cardinale Giovanni Salvati: Alcuni nuovi manoscritti greci in biblioteche diverse della Vaticana', *Scriptorium* 49 (1995), pp. 60-95.
- (19) トーレスはサルヴィアティの図書室の司書を務め、トリエント公会議開催中の 1551 年にフィレンツェで刊行した自著に、司教(主教)の居住地問題に関連する 8 通のアタナシオスの書簡のラテン語訳を収録している。Talbot, *The Correspondence*, p. xlii.
- (20) パテダキスの発見の意義については、拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて」、119-120 頁を参照。
- (21) Patedakis, *Athanasios*, pp. 143-51. アレクサンドリア写本の中で、アタナシオスのテキストが位置するのは 145 フォリオから 228 フォリオまでであり、ヴァティカン写本のように全体をアタナシオス関連のテキストが占めているわけではない。
- (22) Talbot, *The Correspondence*, p. xxxvi.
- (23) Lameere, *La tradition manuscrite*, pp. 15-17.
- (24) Lameere, *La tradition manuscrite*, pp. 17-22.
- (25) Lameere, *La tradition manuscrite*, pp. 22-33.
- (26) Lameere, *La tradition manuscrite*, pp. 33-38.
- (27) Lameere, *La tradition manuscrite*, pp. 38-50.
- (28) Lameere, *La tradition manuscrite*, p. 50.
- (29) Lameere, *La tradition manuscrite*, p. 187. 拙稿「声を救う」、9-10 頁も参照。
- (30) Lameere, *La tradition manuscrite*, p. 177.
- (31) グリゴリオスの教育および知的活動については、C.N. Constantinides, *Higher Education in Byzantium in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries (1204-ca. 1310)* (Nicosia, 1982), pp. 35-49、彼の総主教時代の教義論争については、A. Papadakis, *Crisis in Byzantium: The Filioque controversy in the patriarchate of Gregory II of Cyprus (1283-1289)*, rev. ed. (Crestwood, N. Y., 1997) を参照。
- (32) 皇女シモニスとミルティンの結婚については、A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins: The foreign policy of Andronicus II, 1282-1328* (Cambridge, Mass., 1972), pp. 93-101 and 229-231. なお両者の結婚の交渉役を務めたのは、テオドロス・メトヒティスであった。Cf. L. Mavroumatis, *La fondation de l'empire serbe: Le kralj Milutin* (Thessaloniki, 1978).
- (33) Talbot, *The Correspondence*, no. 1.
- (34) アタナシオスは遅くとも 1323 年までに死去した。死去の年代については、Talbot, *The Correspondence*, p. xxvi と拙稿「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡」を参照。
- (35) 1 フォリオから 89 フォリオまでの部分には皇帝アンドロニコスをおもな宛先とする書簡約 120 通、93 フォリオから 99 フォリオ表までの部分には遺言書を含む 2 通、100 フォリオから 274 フォリオまでの部分には修道士と聖職者をおもな宛先とする約 70 通が収録されている。
- (36) Talbot, *The Correspondence*, p. xxxvi.
- (37) Janin, *Les églises et monastères*, pp. 10-11 and p. 331; V. Kidonopoulos, *Bauten in Konstantinopel, 1204-1328* (Wiesbaden, 1994), pp. 16-18.
- (38) Georgios Pachymeres, *Relations Historiques*, ed. and trans. A. Failler (Paris, 1999), VII, 37. アタナシオスの修道士としての移動とコンスタンティノーブル定着については、拙稿「総主教アタナシオスと二人のラウラ修道院長——聖山と教会を結ぶ道」、『西洋史学』223 号(2006 年)、22-43 頁; 「コンスタンティノーブルの奇跡——総主教アタナシオスに注目して」、『アジア遊学』115 号(2008 年)、66-75 頁を参照。
- (39) この施設はアタナシオスとの強い結びつきから、彼の死後、アタナシオス修道院と称されるようになった。
- (40) アタナシオスの遺体が奇跡を起こすとして崇敬の対象となったことは、記念的テキストの作者であるテオクティストスやグリゴリオス・パラマスのほか、グリゴリオス・アキンディノスがパラマスの教説に対する長大な駁論の中で触れている。Gregorios Akindynos, *Refutationes duae operis Gregorii Palamae CVI titulus Dialogus inter Orthodoxum et Barlaamitam*, ed. J. Nadal Cañellas (Brepols-Turnhout, 1995), IV, 51.

- (41) Th.D. Moschonas, *Καταλόγοι τῆς Πατριαρχικῆς βιβλιοθήκης*, vol. 1: *Χειρόγραφα* (Alexandria, 1945; repr. Salt Lake City, 1965), no. 288 および拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて」、118 頁を参照。
- (42) 副次写本の詳細については、Patedakis, *Athanasios*, pp. 130-33 and p. 154 を参照。
- (43) 詳しくは、Talbot, *Faith Healing*, pp. 39-42 and 148-52 を参照。
- (44) 今日はイスタンブールの総主教座で保管されている。Cf. Talbot, *Faith Healing*, pp. 38-42。
- (45) この写本は、カロテトスの 7 篇の神学論文、7 通の書簡、ニコメディアのグリゴリオス伝、アタナシオス伝、クレタのアンドレアス伝からなる。D.G. Tsamis ed., *Ἰωσήφ Καλοθέτου Συγγράματα* (Thessaloniki, 1988), pp. 28-29。
- (46) Talbot, *Faith Healing*, p. 39。
- (47) Cf. D. Stiernon, 'Le quartier du Xérolophos à CP. et les reliques Vénitiennes de Saint Athanase', *Revue des études byzantines* 19 (1961), pp. 165-88; Talbot, *Faith Healing*, pp. 30-31; G.P. Majeska, *Russian Travellers to Constantinople in Fourteenth and Fifteenth Centuries* (Washington, D.C., 1984)。
- (48) 拙稿「声を救う」、39 頁、註 81 を参照。
- (49) 拙稿「コンスタンティノーブルの奇跡」を参照。イサ・カプ・メスジディについては、W. Müller-Wiener, *Bildlexikon zur Topographie Istanbuls* (Tübingen, 1977), pp. 118-19 を参照。
- (50) Patedakis, *Athanasios*, pp. 137-39。
- (51) 拙稿「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か」および「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡」を参照。
- (52) 詳しくは、A. Failler, 'La promotion du clerc et du moine à l'épiscopat et au patriarcat', *Revue des études byzantines* 59 (2001), pp. 125-46 および拙稿「コンスタンティノーブルの奇跡」を参照。
- (53) Lameere, *La tradition manuscrite*, p. 48。
- (54) I. Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre (ca. 1240-1290) y la trasmisión de los textos clásicos en Bizancio* (Madrid, 1996), pp. 325-28。
- (55) Gregoras, *Byzantina Historia*, pp. 269-70。
- (56) ヴァティカン写本のクワイアの総数は 35 であるが、第 2 部のクワイアは付加であるため、当初の総数は 34 となる。なおヴァティカン写本のクワイアには数字は記入されていない。Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre*, p. 328。
- (57) Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre*, p. 328。
- (58) 総主教座の図書室については、Staikos, *The History of the Library in Western Civilization*, pp. 432-33 を参照。
- (59) Cf. Kazhdan et al. eds., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, s.v. 'Galesiotes, George' (Alice-Mary Talbot)。
- (60) 詳しくは、拙稿「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡」を参照。彼の正式な名誉回復は、14 世紀半ばの聖人認定であったと思われる。
- (61) Cf. J. Darrouzès, *Le registre synodal du patriarchat byzantine au XIV<sup>e</sup> siècle* (Paris, 1971). 拙稿「声を救う」、24 頁を参照。
- (62) Cf. R. Guiland, *Essai sur Nicéphore Grégoras: l'homme et l'oeuvre* (Paris, 1926), pp. 228-57; Nikephoros Gregoras, *Römische Geschichte*, vol. 1, tr. J.L. van Dieten (Stuttgart, 1973), pp. 36-41。
- (63) グリゴラスの生涯の年代的側面については、H.-V. Beyer, 'Eine chronologie der Lebensgeschichte des Nikephoros Gregoras', *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 27 (1978), pp. 127-55 を参照。
- (64) Nikephoros Gregoras, *Byzantina Historia*, ed. I. Bekker (Bonn, 1829-55), p. 181。
- (65) Gregoras, *Byzantina Historia*, pp. 181-82。
- (66) フランシスコ・トーレスがアタナシオスの 8 通の書簡をラテン語訳したのは、まさにこの問題に関連してである。
- (67) 12 世紀の皇帝マヌイル 1 世コムニノスの時代にもこの問題が表面化しており、主教の首都からの退去を命じたマヌイル 1 世の勅令が現存している。J. Darrouzès, 'Décret inédit de Manuel Comnène', *Revue des études byzantines* 31 (1973), pp. 307-17。
- (68) 詳しくは、Booiamra, *Church Reform*, pp. 91-128 を参照。アタナシオスは二度目の在位期、強力な政敵でもあったアレクサンドリア総主教アタナシオス 2 世を首都から退去させている。
- (69) アクロポリティスは 13 世紀の学者かつ政治家であり、晩年は皇帝ミハイル 8 世の腹心としてその教会合同政策を支持した。アクロポリティスの生涯とその史書については、R. Macrides, *George Akropolites, The History* (Oxford, 2007) を参照。
- (70) Gregoras, *Römische Geschichte*, pp. 41-42。
- (71) Failler, 'La promotion du clerc et du moine' および拙稿「コンスタンティノーブルの奇跡」を参照。
- (72) グリゴラスがアタナシオスの書簡の現物を参照した可能性も考えられなくはないが、後に議論するとおり、彼が大量の書物を閲覧できる環境に長く暮らしていた事実を考慮すれば、書物に集成された書簡を彼が参照したのはまず間違いない。
- (73) Gregoras, *Byzantina Historia*, p. 182。
- (74) Gregoras, *Byzantina Historia*, p. 186。
- (75) Talbot, *The Correspondence*, no. 114, ll. 26-27。
- (76) Gregoras, *Byzantina Historia*, pp. 183-84。
- (77) Cf. Guiland, *Essai sur Nicéphore Grégoras*, pp. 23-54; H.-V. Beyer, 'Nikephoros Gregoras als Theologe und sein erstes Auftreten gegen die Hesychasten', *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 20 (1971), pp. 171-88。
- (78) I. Ševčenko, 'Metochites and the intellectual trends of his time', in: P. A. Underwood ed., *The Kariye Djami, vol. 4: Studies in the art of the Kariye Djami and its intellectual background* (London, 1975), pp. 19-91 at pp. 80-83。





図1 ヴァティカン写本 (Codex Vaticanus Graecus 2219)、1 フォリオ表; 写字生、ゲオルギオス・ガリシオティス

(I. Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre (ca. 1240-1290) y la transmisión de los textos clásicos en Bizancio* [Madrid, 1996], pl. 13)

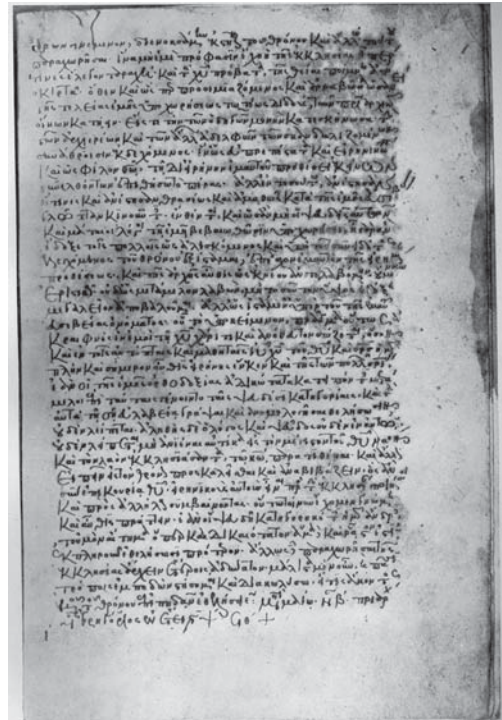


図2 モデナ写本 (Codex Mutinensis 82)、194 フォリオ表; 写字生、ゲオルギオス・ガリシオティス

(W. Lameere, *La tradition manuscrite de la correspondance de Grégoire de Chypre* [Bruxelles, 1937], pl. 1)

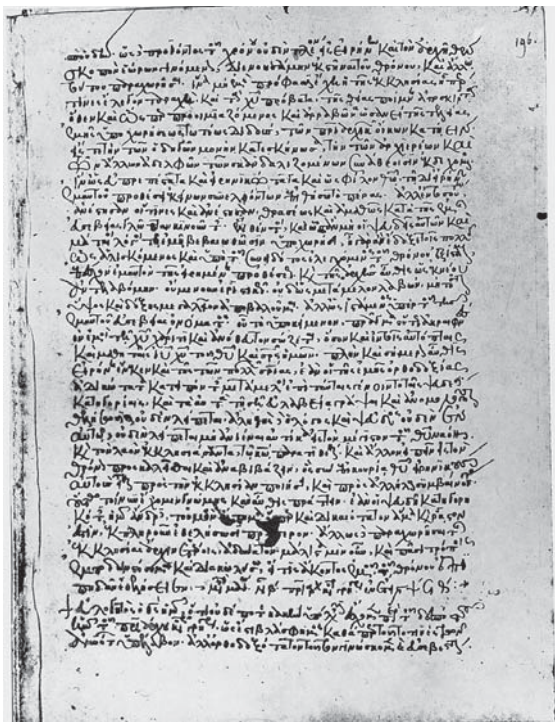


図3 ライデン写本 (Codex Leidensis Bibliothecae Publicae Graecae 49)、196 フォリオ表; 写字生、ゲオルギオス・ガリシオティス

(W. Lameere, *La tradition manuscrite de la correspondance de Grégoire de Chypre* [Bruxelles, 1937], pl. 2)



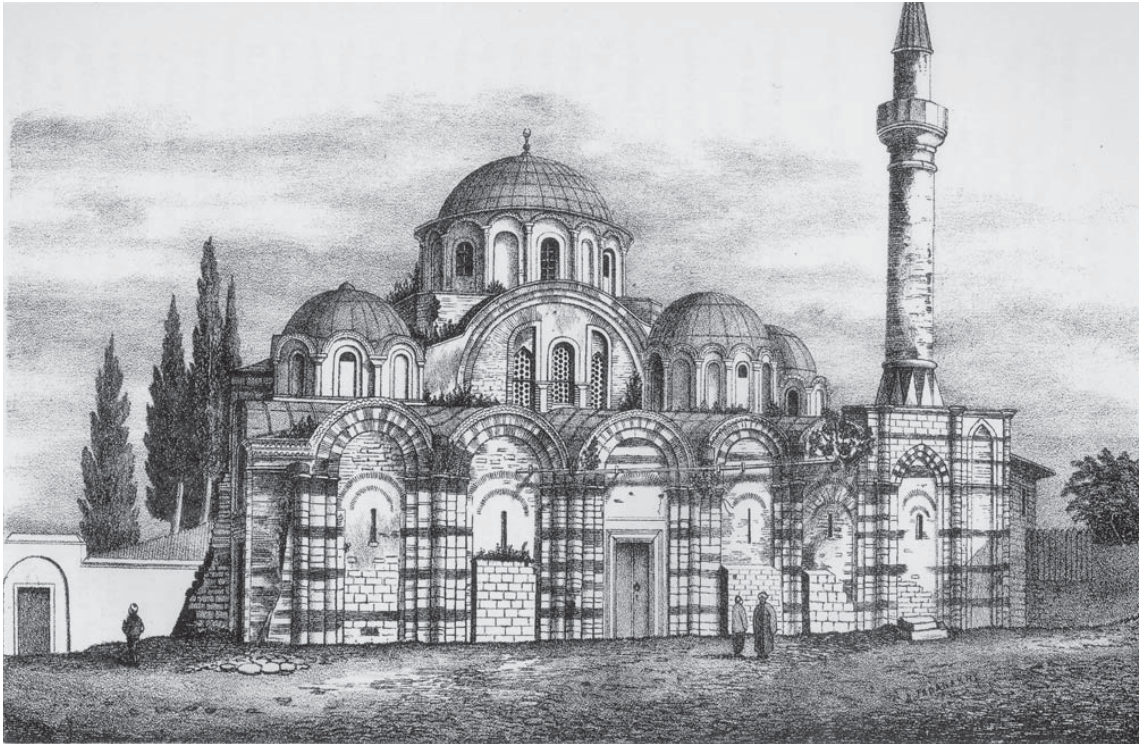


図4 19世紀後半に描かれたカーリエ・ジャミイ、西側  
(A.G. Paspates, *Byzantinai Meletai: Topographikai kai Historikai* [Istanbul, 1877])



図5 今日のカーリエ博物館、東側  
(2009年12月、筆者撮影)





図6 王座のキリスト（中央）とコーラの聖堂を捧げるテオドロス・メトヒティス（左）  
（2009年12月、筆者撮影）